

【鮎と長良川の世界】

長良川は、岐阜県の中心を通り、北から南へ流れる。大日ヶ岳近くの水源から伊勢湾の河口まで、166キロにわたっている。長良川は人口400,000人の岐阜市を直接通って流れるが、日本で最もきれいな3つの川の1つと考えられている。長良川は多くのコミュニティに飲用水と灌漑用水を提供している。また、岐阜県の経済において極めて重要な役割を果たす漁業を下支えしている。この川は水質が素晴らしいため、生息環境が急速に消滅しつつある珍しい種（ネコギギやオオサンショウウオなど）を維持することもできる。また、長良川は海に直接繋がっている。河口近くの堰には魚道が設けられ、水生生物が自由に通れるようになっているのだ。この工夫は、ライフサイクルにおいて川と海を往来する回遊性の種にとって極めて重要な意味を持つ。長良川におけるこのような種の例として、サツキマス、アユカケ、モクスガニ、そして鮎が挙げられる。

鮎（学名：Plecoglossus altivelis）は、くしのような歯と帆のような背びれを持つ銀色の魚である。成長した鮎は、およそ30センチの長さになる。寿命はわずか1年あまりである。鮎の稚魚は12月にふ化し、プランクトンを食べながら、海岸沿いで最初の冬を過ごす。春には水がおよそ10℃に温まり、鮎の群れは長良川河口に集まる。年ごとの水温の違いに応じて、この現象は早ければ2月初めに見られることもあるが、通常は、3月あるいは4月に見られる。

長さおよそ7センチに成長した稚鮎は、上流に向かって泳ぎ始める。川の中流域（地図の真ん中に円で示されている）に辿り着くまでに、長さは10～20センチになり、のこぎり状の歯を生やす。夏が始まると、鮎は自分専用の餌場を確保する準備をする。川の中でも、広い、砂利でできた区域がある場所は、餌場として理想的である。それぞれの鮎はおよそ1平方メートルのなわばりを作り、徹底的に守ろうとする。鮎は川床の岩に生える藍藻を食べ、岩には鮎の歯特有の食べ跡が残る。この跡は、一度沈んだ岩が水面上に露出した際に確認できる。

鮎は夏の間に成熟し、秋の台風が来るまで、単独で生活し続ける。水位が上昇すると、鮎のライフサイクルは次のステージに入る。10月と11月には、鮎は再び群れを作り、流れを利用して下流に移動する。岐阜市近くの場所（河口からおよそ40キロの位置）に到達すると、卵を生む。

鮎は、直径わずか1ミリの卵を、一匹あたり平均50,000個産む。卵がふ化するのにおよそ2週間かかり、その後、新たに生まれた稚魚は下流、そして海に運ばれる。

日本の鮎の数は、病気、環境の変化、水質の低下により、ここ数十年で劇的に減少した。しかし、長良川では、住民と地元の漁協が初期より持続的な保全の努力を続けた結果、鮎の数は維持されている。1915年、長良川水産組合は人工ふ化・放流プログラムを開始した。今日では、長良川の河口にあるふ化場で毎年1億以上の卵が産生されている。

この展示の隣には、鵜舟の舟首のレプリカを備えたインタラクティブな展示物が置かれている。舟首には、動かすことのできる篝火（水面下の鮎を照らし出すために使われる火の籠）の模型がぶらさがっている。篝火の光を川の絵の上で動かすと、鮎が姿を現す。